

トラニラスト服用により尿中好酸球増多を認めた一例

◎金森 隆樹¹⁾、林 和樹¹⁾、飴谷 理恵¹⁾、岡 仁美¹⁾、村中 結香子¹⁾、永井 真理子¹⁾、寺井 孝¹⁾
厚生連高岡病院 臨床検査部¹⁾

【はじめに】

トラニラストはケミカルメディエーター(ヒスタミンなど)と呼ばれる各種炎症細胞からの化学伝達物質の放出を抑制することにより、痒みなどのアレルギー症状を緩和させるほかに、線維芽細胞への直接作用、サイトカインなどの産生抑制作用を有し、手術後のケロイドや肥厚性瘢痕に対し効果を示すと考えられている。またトラニラスト使用により膀胱炎様症状が出現することがあり、その際には末梢血中好酸球増多を伴うことが多いとされており、使用には注意が必要である。今回我々は尿沈渣検査にてトラニラストにより惹き起されたと思われる尿中好酸球増多を認めた症例を経験したので報告する。

【症例】

90代男性。他院での痔の手術歴があり3年以上前よりトラニラストを服用、アレルギーは無し。他に前立腺肥大症の既往があり2023年1月に頻尿、尿漏れなどの症状に対しハルナール処方、同年2月に血尿出現のため施行した尿細胞診ではClass IIと診断されていた。5月になっても血尿が持続していたため精査目的で当院への紹介受診となった。初診時の検査結果からトラニラストによる膀胱炎様症状の出現が疑われたため服用を中止し約1カ月後に再検査することとなった。

【検査所見】

<初診時>尿定性：潜血(3+)、白血球反応(-)、尿沈渣：RBC >100/HF, WBC 50-99/HF, Sternheimer 染色では白血球の細胞質にギラギラした顆粒が多く認められた。尿細胞診：赤血球と白血球が多数みられ、白血球は好酸球が多く占めていた。また明らかな悪性所見は認められなかった。膀胱鏡：膀胱内に粗大な病変なし、肉柱形成、全体的に膀胱炎疑う粘膜浮腫が認められた。血液検査：好酸球数、血清IgEは検査せず。
<服用中止後>尿定性：潜血(-)、白血球反応(-)、尿沈渣：RBC 1-4/HF, WBC <1/HF。尿細胞診：好酸球はほとんど認められなかった。

【結語】

今回経験した症例は、細胞検査士から初診時に実施した尿細胞診結果についての情報提供があったことで気付くことができた症例であった。尿定性と尿沈渣で乖離所見が認められた場合には、その原因を探りながら鏡検する必要があることを改めて痛感させられた症例であった。

連絡先：0766-21-3930